

沖繩諸島における「町」の形成

朝岡康二

- 一 はじめに
- 二 那覇の空間構造
- 三 首里・那覇の「マチ」
- 四 那覇・首里の「マチグァー」
- 五 那覇のマチャ

論文要旨

本稿は、南島における近代的な意味での都市の形成を、商業区域の成立の側面からみていこうとするものである。

比較的に早くから王権が発達して、国際交易の要衝となった沖繩本島の場合、首里・那覇・泊が早くから都市的性格を獲得していたが、これにはいわゆる商業地区の形成が伴わなかった。そして、沖繩方言で「マチ」といえば、本土でいう「市」に類似するものを指し、その自然発生的な性格は、公設市場制を取り入れた後も持続してきた。それは「ナファヌマチ」の変容によって知ることができ、現在の開南や農連市場周辺に受け継がれている。この「マチ」は基本的に女の世界だったのである。

こうした「マチ」には、更に小規模のものがあり、これを規模の大きな「マチ」と区別して、「マチグァー」と称している。那覇にはいくつかの「マチグァー」が立ったが、それは、早朝あるいは夕方など時刻を定めて一〇名そこそこの売り手が集まるといったささやかなもので、多数の人々が蝟集する

- 六 石垣・四個の移住民と商工の展開
- 七 記憶のなかの石垣
- 八 石垣四個の明治・大正時代の商店
- 九 まとめにかえて

「マチ」とは、規模や組織化の程度において異なっていた。

一方、南島では商業的な拠点としての「店」の誕生も新しかった。沖繩方言では「商店」のことを「マチャ」といったが、「マチャ」の普及・定着は、主として近代の本土寄留商人の登場によって始まったといつてよく、このために「ヤマトウマチャ」の名称が使用されたのである。そして、「マチャ」を拠点とした沖繩県人の商業活動が活発になるのは、戦後のアメリカ政治においてであった。

これとは別に「小規模なマチャ」を意味する「マチャグァー」があり、それは宅地の石垣の一部を壊して簡単な小屋を作り、そこでながしかの商いをするものを指し、これも女の仕事であることが多かった。本稿は、これらの商業形態の展開過程を那覇と石垣四個について、具体的に跡づけようとするものである。